



ぬるい水みたいだ、そう言われたことがある。お前は常温で放置した水みたいだ。混じり気はないけど澄んだ感じはしなくて、冷たくも熱くもない。その眠そうな目とか、やる気のない髪型とか。

ぼくはあのとき、そう言った相手をながめて、それこそやる気なく笑ったんだと思う。ぼくと正反対の切れ上がった瞳が細められて、ひどく甘く笑みをかえしてくる。思いだす光景と感情はのどをしめつけるほど鮮やかで、そして痛い。

ぼくはゆっくり手をのばして、あのときと変わらない顔の横にそっと花をおいた。首をちぎった真っ白な牡丹。おだやかすぎて、ちっとも似合わない。その頬に触れたぼくの右手の小指が反射的に離れる。ドライアイスで冷やされた肌。えずく声や鼻をすする音に取り囲まれて、彼は居心地悪そうに目を伏せたまま、身動き一つしなかった。

窓際の後ろから二番目。休み時間の喧騒は教室の中心から池の波紋みたいに濁った空気をゆらす。くぐもった同級生の声をBGMがわりに、ぼんやり十分間をすごすのがぼくの日課だった。おわりかけの四月は、一階の教室にも眠気を吹き込んで廊下へ歩み去っていく。腫れあがって首の皮膚の上からつまめるまでに成長したリンパ腺をいじっていたぼくは、合板の机と本のページをぬくめる陽射しをさえぎった影におどろいて顔をあげた。教室の外から、ぼくに背をむけた格好でサッシにもたれかかるやつがいる。ぼくがそのサッシから三十センチと離れていないことには気づいていないようだ。かしゃかしゃと小さな音が聞こえる。耳に挿しこんだイヤフォンからもれるのはたぶん、クイーンのウィー・ウィル・ロック・ユー。陽射しに串刺しにされた髪があかく透けて、顔は逆光で黒くつぶれてみえた。

目の端にぼくの動きが映ったか、彼はぱっとアルミサッシから背を離れた。

「悪い、気づかなかった」

声変わりの途中みたいな高いかすれ声で言いながら、イヤフォンから伸びる黒く細いコードをひっぱって、左耳だけを音楽から解放する。小柄な彼は、確かニクラス隣の有名人だ。名前はよく覚えていない。ぼくはいいよと首をふってあいまいに笑った。

物理的にも精神的にも、ひとにあまり近づかないぼくには、至近距離が少しばかりつらかった。のけぞるようにイスを引く。彼はサッシを鉄棒のように使って上半身を教室の中へ折りこみ、窓の底辺に片膝をついて身体を支えた。身軽な動きにはずしたイヤフォンがふり回されて、音を連れたままぼくの鼻先をかすめる。同時に、苦いような若い体臭がふと通りすぎた。彼は鼻に浮いた汗を親指と人さし指でぬぐって、ぼくを観察するようにじっと見た。

「何か、用」

ぼくは教室のざわめきの波にまぎれそうな声で訊いた。人見知りは二歳の頃からなおらない、ぼくの不治の病。何とかぼくの言葉を聞きとった彼は、くしゃくしゃの赤っぽい短髪に指を入れて搔き下ろしながら、変な顔をした。うんともいいやとも言えないようだった。しまいには、ぼくと額をぶつけそうなほど顔を近づけてくる。ぼくはヘビに首をさしのべられたカエルみたいに硬直した。きつい印象の目玉が焦点を絞る。

「そんなに顔近づけられると怖いよ」

やっとの思いでそれだけ言うと、彼はひょいと首をひっこめた。早口で言う。

「あ、いや、ごめん。いつもここでぼおっとしてるから気になってて」

「そう。たいした理由は、ないんだけど」

ずっと手をはさんだままだった読みかけの本をひっくり返して伏せる。セロファンのブックカバーがチカと光って目を射た。ぼくが目を細めていると、彼はそれを別の意味にとったようだった。骨ばった指で『アダムとイヴの日記』を指差す。

「読書、じゃました？」

「あ、いや」

「悪かった」

ぼくが何も言わないうちに、彼はサッシからとんと飛び降りて上靴のまま駐車場の方へ姿を消してしまっただけの四月の教室が残った。

ぼくはまた、右手で首のしこりをいじった。けれど、何となくマーク・トウェインの続きを読む気にはなれなかった。

罪悪感に似た思いと好奇心が気恥ずかしさを上回り、三日目の昼休みにぼくは教室の窓から身をのりだして、コンクリートの地面に座る彼に声をかけた。彼は空のブリックパックをストロー一本で支えながら、ぼくのほうを見あげた。耳には相変わらず小さなイヤフォンがささっている。今日の曲はシンディー・ローパー。手には食べ終わったパンの袋と煙草のソフトケースをにぎっている。彼は今度は古いCDプレイヤーを止めて、くるりと身をひるがえして立ちあがった。ぼくは、彼がぼくの本にしたように、プレイヤーを指差す。

「洋楽、好きなの」

「ああ、聞こえてた？ うん、まあまあ」

「プレイヤー、CDなんだ」

「いちいちMDとかに入れるのが面倒でさ。タダでもらえたし、ちょうどいいやと思って」

プレイヤーの窓から見えるジャケットはセブン・シンス。ぼくは彼の話しかたや声に、何とはなしに好感をもった。彼はさらさらいう遠い竹林の葉ずれみたいな話し方をする。そのくせ、はっきりと耳にはいり込んで意味の塊をつくるのだ。

その日、あきれれるほどゆったりした春の正午を、ぼくらはそうやって話しながらすごした。ぼくが意味のない会話を楽しんだのは、それが生まれて初めてだった気がする。ただ、彼が煙草をひょいとくわえたときだけは、少し困った。

「ここ、すぐ先生くるよ」

「んん？ うん」

生返事でライターを捜す。ぼくはもう少し声を強めた。

「中学生で煙草吸ったら、身長伸びないよ」

彼は三白眼ぎみの目を剥いて、ぼくを面食らったように眺めた。一瞬黙り込んでから、拗ねたようにぼくの頭をてのひらで押さえつける。

「うるせーよッ」

その声がどことなく楽しそうなのが不思議だった。でも、押さえつけられた頭は案外痛かった。

ぼくが彼の名前を知ったのは、なんとそれから一週間もあとだった。訊きそびれると訊きにくいのが名前だ。彼も同じだったらしく、切り出すのに困っていた。機会あってぼくの方から尋ねると、彼はエスと名乗った。えすえいし。うっかりするとSH、と聞こえそう。ぼくは、末沼恭一郎、と自分の名を言った。

「へえ、おもしろいな」

「何が」

「おれがSでお前がN。磁石みたいで」

「N？」

「ス『エヌ』マ、だろ」

そんなことを言われたのは初めてだった。どう答えていいかわからず、無言で目を瞬く。彼は面白くない冗談を言ったときのようにぼつの悪そうな顔をして、気にするなと言う。

「単なる思いつきだよ。恭一郎な。きょーいちでいいか」

「うん。おれは何て呼べばいい」

「苗字以外」

「じゃあ、普通にエイシで」

英嗣は笑ってうなずいた。と、彼の尻ポケットで携帯が震え出す。ずっと無表情になった英嗣は、しゃがみこんでフラップを開くと通話ボタンを押した。

彼の休み時間はたいていこんな感じだった。昼休み、授業の合間、放課後、彼の携帯はひっきりなしに彼を呼ぶ。十分おきに餌をねだる鳥のヒナのようだ。彼はどんな電話にもすぐ出て、応対していた。

彼が有名人である理由は、すぐにぼくにも理解できた。

「S」。ぼくは最初知らなかったが、それは架空の学校生活にありがちな伝説みたいなものだ。どうしようもなくなったらSを呼べ。恋愛のトラブルやケンカの仲裁、教師と問題を起こした生徒のフォロー、部活の維持や進退問題、隣接校の生徒との問題なんかに顔が利き、はては家庭内の問題など個人的なトラブルにも必要とあれば力を尽くす。中学生のよろず屋なんて物語だけかと思っていたけれど、英嗣はまさしくそんな役回りだった。といっても、それはひどく生々しさをともなったもので、綺麗にまとまったスマートな筋書きもなければ超人的でニヒルな主人公もいない。英嗣はどこか空虚な顔をしたまま、携帯をひつつかんで走り出す。ぼくはいつも窓際の後ろから二番目の席から、どこかに向かうその小柄な背中を眺めていた。

ぼんやり洋楽を聞きながら煙草をふかす英嗣を、ぼくは今でもはっきりと思い出せる。けれど、遠ざかる背中 of 悲壮な緊張とあの澄んだ横顔とはどうしても重ならないのだ。

二学期が始まって、まだ日は浅い。暑さは刺さるように教室を茹で上げ、早くも指紋で汚れた窓の向こうを大人のでのひらほどもあるオニヤンマが優雅に滑っていった。

もう、彼に面識ができた春から五ヶ月がたっていた。その五ヶ月間、何をしていたかなんて覚えていない。それくらい、お互いに邪魔にもならず、傷つけるほど近くもなく、生ぬるい距離を保っていた。その証拠に、ぼくは、それまで英嗣がSの「仕事」をしているところを見たことがなかった。あるいはお互い、それは不可侵の領域だったのかもしれないけれど。

今日最後の起立と礼が終わって、生徒が騒ぎながらわらわらと廊下に出てゆく。プリントの入った薄いクリアファイルを理科室の机の棚に忘れたことに気づき、ぼくは鞆をつかんで立ちあがった。窓の外をのぞくが、英嗣は定位置には来ていない。

階段をのんびり上がる。どうせ帰ってもやることなんてないのだ。ぼくは三階の廊下の端にある理科室の、開いた扉の前に立った。墓石の列のようにリノリウムの床に浮かぶ黒い大きな机には、ときどき思い出したように涙をこぼす狭い流し台がとりつけられ、角のようなガス栓がはえている。ぺたりとした敷居をふみこえようとすると、中から低い話し声が聴こえた。

ぼくはそっと首から理科室に入った。見慣れた小柄な背中と、髪の高い女の子の後ろ姿。英嗣がゆっくり呟いた。

「仕方ない、ってのが本心ならいいけど、我慢してるならそれはよした方がいい。アンタには自分の幸せを主張する権利があるよ」

「……うん」

「二人に別れてほしくないなら、そう言えばいい。おれはその結果にまでは責任は持てないけど、アンタがだまってることで事態が良くなる感じもしないしな」

「でもね、お父さんもお母さんも一緒にいるのが辛そうなの。私が離婚しないでって言ったら、もっと辛くなるだけだと思う。わがままは、言いたくない」

ぼくは盗み聞きに後ろめたさを感じたが、脚は根が生えたように動いてくれない。英嗣の声が更に柔らかくなった。

「でも、アンタも辛い。そのことを伝えないと、二人とも気づかないことだってあるだろう。親だって俺やアンタと同じ人間で、自分のことだけで手一杯になる時もある。……だから、親に捨てられるとか、自分が悪いとか、そういうのじゃない」

一瞬、空気の動きが止まった。少女の声がかすかにゆれて、泣き出しそうになるのがわかった。

「うん、ありがとう。ごめんね、話きいてもらって」

「気にしないでいい。やりたくてやってるだけ」

「知ってる。でも、ありがとう。じゃあ、そろそろいくね」

そう言って少女が身支度をはじめた瞬間に硬直が解け、ぼくはあわてて身を引いて理科室準備室に飛び込んだ。エタノールの鼻を刺すにおいがする。息をひそめていると、少女はひっそりと廊下を歩いていった。

ぼくはこそこそと理科室に移動した。さっきとは違う角度からでも、英嗣の顔はみえなかった。ぼくは息を殺していた。じつりと汗がにじんだ背中に、なぜか鳥肌が立った。残暑の中で、ぼくはひやりとする何かを感じていた。

英嗣の身体をつきぬけて周りの壁まで、クモの糸のようにはりめぐらされた神経。まだ頼りない肩と伏せた顔に、おそろしくはりつめた何かが漂っている。キシキシと引き絞っていく弦が視えるようだった。首を絞められたように、吐き出す浅くつらそうなため息。

「エイシ」

ぼくのききとりにくい声に、英嗣はびくりと肩を震わせて振り返った。大きく鋭いアーモンド形の目がナイフみたいにぼくに突き刺さる。それは敵意でも恐怖でもなかった。からっぽで、研ぎ澄まされた感受。そしてそれを必死で保とうとする緊張。

「何だ、きょーいちか」

つくったような明るい声だった。ぼくはあいまいにうなずいた。自分の数十分前に座っていた席に近づき、机の下を探ってファイルを取り出す。そのうちに、辺りにまで伝播していた圧迫感が少しずつ薄らいで、けだるい空気に戻ってゆく。英嗣はぼくから目を逸らし、机につつぶして大きく息をついた。

「あああ、疲れた」

彼女と話す英嗣の声はおだやかだった。一体何をそんなに張り詰めていたのだろうか？

ぼくは右手にファイルをぶら下げたまま、その場に突っ立っていた。去ってしまうことも、かといって声をかけることもためらわれて、おしのようにだんまりを決め込む。石像になった気がした。校庭のメタセコイアのつぶやきが理科室に流れ込んでくる。元気をなくした蝉の声が尻すぼみになってとぎれた。プールから聞こえる水泳部の喚声とホイッスルの音。ばかにしたようなカラスのかけあい。

「なあ」

顔を隠したまま、くぐもった声で英嗣が言った。

「あの子、ああは言っても、絶対親に離婚しないでとは言わないよな」

「そうだろうね」

ぼくは口だけ動かして答える。英嗣はくすりと笑った。

「聴いてたんだな、さっきの」

「ごめん」

「口外無用、それだけ守ってくれば良いよ」

わずかに顔をあげて、そのまなざしがぼくの目をとらえる。思いつめたみたいな濡れた目。

「あの子の中で、さびしさとかかなしみとかって、どこへいくんだと思う？」

「わからない」

ぼくの答えに、英嗣はかすかにのどの奥で笑った。そして、ぱたんと顔を伏せてまた貝にもどってしまった。ぼくもしかたなく石像にもどる。二ノ宮金次郎の気分。

さらさら、ざわざわ、さらさら。

風がこころなしか涼しくなって、ひたひたと満ちる光が淡く色づいてくる。とろりとした黄金

の光が熱に焼けたアルミサッシをにぶく照らして、ときおり生徒の大声が遠く響いてこだまする。その時間は気が遠くなるほどしずかだった。

何分かして身を起こした英嗣の顔は疲れていたが、緊張はもうとけているようだ。

「帰るか」

無理のなくなった笑顔に、ぼくはうんと言って鞆を肩にかけなおした。

もっとも顕著に英嗣の緊張を感じるのは、荒っぽいトラブルのときだった。英嗣は正義感があるというより、単純に筋の通らないことがきらいだ。頭ごなしに生徒を叱りつける教師に面と向かって怒鳴ることもあった。弱いものをいたぶるガキ大将の一団に、てめえら恥ずかしくないのかとふっかけて、つかみ合いのケンカになったこともあった。それが善意や良心からの行動にはみえなくても、偽善や虚栄にもやっぱりみえなかったから、ぼくは不思議でしかたがなかった。

無理を、しているようにみえた。

とてもつらくて痛そうなのに、歩くことをやめない修行者みたいだ。自分のためでも、誰かのためでもなく、そういう宿命なんだとでもいうように英嗣はすすんで無理をする。

その日も、自分の教室から飛び出してきた英嗣はぼんやり歩いていたぼくに激突しそうになって、急角度で旋回してぼくの来た方角へ走っていった。一瞬ぼくを見たそのきつい目は、いつかと同じようにうつろで強い光を放っていた。

ぼくはゆっくり振り返って、英嗣の走ってゆく方角を見た。彼の背中に爪をかけるおおきなものの正体は、ぼくには見えなかった。けれどそいつは、忍び寄る秋の気配よりは、きっと彼をせつなく蝕んでいたにちがいない。彼の叫び声が廊下から割れ鐘を叩くように響いた。てめえ、逃げんな、他人のものくすねていきがってんじゃねえ。ケンカしたけりゃ正面からいきやがれ。

中学生なんてそんなもんだよ、とは言えなかった。上靴や体操服なんかを捨てたりして、とにかく誰かをいじめて優位に立つ。そうでもしないと自分をアピールできない哀れな子供なんて、ローティーンには掃いて捨てるほどいる。でも、された方の痛みや悔しさを、英嗣は決して見過ごさないのだ。

ぼくはもちろん、追ったりはしなかった。怒鳴り声をききつけてやじ馬に加わりに行く人の流れに逆行して、昇降口へ向かう。自分以外の痛みまで、それが義務みたいに背負いこむS。ぼくは彼にききたかった。

君の中で、疲れや甘えはどこへいくの。

たぶん、彼自身その答えは知らない。そして、知りたくもないのだろう。あの両親のことを話していた女の子と同じだ。さびしさのゆくえなんて、知らないほうがいい。

ぼくはゆがんで開きにくくなった下駄箱の鉄の扉を強く引いた。短い悲鳴をあげて扉が開く。その狭い空間から、ぼくの運動靴は忽然と姿を消していた。

その日から、何とも微妙ないやがらせが始まった。たぶん、ぼくのクラスで標的にされていたおとなしい子がとうとう登校拒否になったからだろう。ぼくはクラスに特別親しい人もなかったし、いつも黙っていた。それが、力を持てあましたガキには好都合だったにちがいない。翌日

登校すると、ぼくのイスがなくなっていた。仕方がないので、ぼくはまだ登校していない首謀者のガキのイスを自分の机に移動させた。何食わぬ顔で朝の会を過ごす。三分遅刻のサル山の大将は、獯猛な目つきでぼくをにらみつけてきた。休み時間には、そのグループのガキが次々にぼくの机を蹴り上げて通った。幸い、重い鞆が両脇にかかっていたので、机はそう簡単には動かなかった。

教室移動はぎりぎりまで動かず、帰るときは真っ先に。給食はさっさと食べて、全ての荷物を鞆につめこんで図書館へ避難する。机には傷が増え、上靴にも土や針が入れられたが、用心していたので大事には至っていない。うかつに動かないことが肝心。怯えたり、かっとなったりしないほうがいい。

前の席のやつがプリントをぼくまで回さず、丸めて床に捨てる。ぼくはそいつの襟ぐりのくたびれたシャツの背中に、窓を這っていたクモをしずかに放り込んだ。肉のたっぷりついた背中が踊り、ぼくは笑いをこらえるのに苦労した。お互いエスカレートするいやがらせに、いつまで耐えられるか。根競べだ。机の棚に誰かが吐いたガムが入れられている。掃除の時間に大将の机と入れ替える。進歩のないやり口には、同じ仕返しで思い知らせてやる。おまえら、もしかしなくてもばかだろう。言外のメッセージがわかるほど、やつらは頭が良くなかったようだ。

直接的な暴力は避けたかったから、休み時間は学校中を徘徊するようになった。おかげで、ぼくは学校の穴場をいくつも発見した。たとえば、ドアの立てつけが悪くて鍵が閉まらない木工室。焼却炉の裏の茂みを抜けた、樹に囲まれた小さな空間。いつも誰もいない、ほこりっぽい図書準備室。ベランダを伝って、一階を閉鎖された外階段から上れる屋上の貯水タンク前の広場。荷物を背負ったままこっそり移動する。英嗣ほどではないけれど、少し身軽になった。三階のベランダの手すりから、外階段へ乗り移る。錆びて手につく酸化鉄の粉を払い、うるさい段を上って屋上へ足を踏み出した。ぼくの小さな止まり木。

ひとりでぼんやりするのは、それほど苦痛ではなかった。普段とさして変わりはない。ただ、多少退屈だった。麻痺しかかった感情で、ふと考える。

英嗣と、どれくらい顔をあわせていないだろう。

あまり覚えていないが、かれこれ十日近くになる。退屈しなかったのは、思えば英嗣と話していたときくらいだ。そう考えると、退屈は急に重さを増してぼくを押しつぶしそうになった。

ぼくはそれほど人に頼るのがうまくないし、苦手だ。自分の問題だから、英嗣を巻き込む気もなかった。やりかえすならひとりでも何とかなる。けれど、逃げ回る時間はひどくうつろだった。これまでも、ひとりでじっとしていると色々考えることはあったし、苦しくなることも何度もあった。けれど、せつなくなったのは初めてだった。

寝転がった視界いっぱい広がる青くて遠い空が、ぼやけて紫と緑にゆがむ。

つまらない、つまらない、つまらない。

世界で一番つまらないのは、ぼくという人間だ。

ぼくがいてもいなくても、日常はちゃんと回るから。

初めて、授業をサボった。校舎の壁に反射した運動場のかけ声や笑い声がぼくのところまで上ってくる。たまに、風向きが変わると先生の野太い声がとぎれとぎれに聞こえた。いつものメタセコイアが、また何かをつぶやいている。睫についた涙のかけらが、視界の上できらっと光った。

誰も探しにこない場所に隠れて、見つけてもらうのを待っている。隠れん坊の気分だった。

「S」

ぼくはそっと呼んでみた。彼が嫌がった、苗字の伝説。彼は今頃、また携帯の呼び出し音に耳を澄ませながら学校のどこかに潜んでいるのだろうか。それとも、授業を受けながらつかの間の安眠をむさぼっているだろうか。失礼ながら、彼がまともに授業を受けているところは想像できなかった。

つらくなった誰かは、こんな気持ちで幼い伝説にすぎるのだろうか。ねえ、ぼくの話聞いて。つまらなくないって、そうだよなって、そう言って。隣りにいて、音楽を一緒に聞いて、とりとめのない会話をして。ぼくがここにいることは、間違いでもなんでもないって証明して。

英嗣はそれを、あの空虚なまでに深い目で見つめて、でたらめに柔らかい優しさで受け入れる。その背中に爪を食い込ませている、あのおぞましい緊張と疲労など、決して見せずに。崩れ落ちそうな背骨、引き締められた薄い唇、それを自分でも拒絶して。

——おれは、そんなに弱くないから。

いつか聴いた英嗣の言葉を思い出して、ぼくはうめいて床を殴りつけた。一瞬でも、彼を当てにした自分が情けなかった。

誰だって、自分の体重以上のものを、ずっとは支えてられない。

他の誰が投げ出しても、ぼくだけは、彼には。

カラスが一羽、貯水タンクに座り込んで物騒な声で鳴いた。

二学期が始まって、もうすぐ二ヶ月になる。英嗣とは顔を合わせないまま、クラスのいじめには決着がつかないまま。

ぼくに向けられたいじめ自体は、それほどひどくはなかった。ぼくのクラスで登校できなくなった子は恐喝もされていたし、ありとあらゆる方法で矜持を叩き折られていた。ぼくは多少狡猾だったから、それはされずにすんだ。けれど、逃げる自分はきらいだ。やり過ぎそうとする自分も、英嗣に頼ろうとする弱い自分も、たまらなく厭だった。

英嗣はぼくを探しているようだったが、ぼくはどうしても彼に会いたくなかった。無駄にプライドが高いのが、思春期ってやつだ。

でも、いつまでもそうしてられるほど人生は甘くない。

教室移動の最中に授業開始のチャイムが鳴った。人気のなくなった渡り廊下でサルの大將とサル軍団がぼくを取り囲む。とうとう来てしまった。ぎらぎらした、凶暴な目が四対。殺気立っていていやだ。大將がぼくの肩を掴んだ。ごつんとコンクリートの柱に頭を打ち付けられて、ちょっとくらくなる。ぼくより二十センチはでかい身長と、ぼくのふとももほどありそうな二の腕。とりあえず、家に帰れる程度にしておいてほしい。

「お前さ、生意気すぎ。優等生きどってんじゃねえよ」

激しく身体を揺さぶられ、ぼくのMDプレイヤーのイヤフォンが、いつかの英嗣のように左耳だけ落ちる。リンキン・パークのハイブリッド・セオリー。六番が冗談みたいに右耳に流れ込む。ラナウェイ。

I wanna run away never say good-bye I wanna know the truth...

『さよならは絶対言わない。逃げたいんだ。真実を知りたい』

もう、いやだ。

衿を掴みあげられてのどが詰まる。そのまま横っ面を張られて、眼球の裏側に朱色が閃く。熱い。自分の頭の奥に色と熱がにじんで広がって、肺の底があつく、あつく。どうして。逃げて、それなのになんで、もう厭だ。くやしい、むなしい、すべてが遠くて手が届かなくて弱い自分も頭の悪いこいつらも何もかも、厭だ。こんなの、「そんなに弱くないから」こんなのもう厭だ。頼らない。絶対に頼らない。これ以上お前の背中にあの抉る爪跡を、

どうすれば、いい？

ラナウェイ。

これは降伏じゃない。抵抗の方法なんて無限にある。

ぼくが目を背けたかったのは、お前たちなんかじゃない。

衿を掴んだ手に爪を立て、憎しみをこめてかきむしる。ゆるんだ指から身体を逃がし、持っていた傘を振り上げて大將の股間を思いきり突き刺し、目線の高さでその先を振り回した。思わず身をひいた残り三人の間を、傘を放って身をかがめ走り抜ける。渡り廊下を走りきり、左に折れ

曲がって階段をめざす。罵声が首筋に突き刺さってくる。みぞおちが内側から焼かれるようにあつい。視界が平面になりがくがくと揺さぶられる。

I wanna know the answers no more lies I wanna shut the door and...

『嘘はもういい、答えが知りたい。ドアを閉めて、そして……』

鞆が肩に食いこむ。振りかえり、肩紐をつかんで、横殴りにするように廊下へ中身をばらまいた。追っ手の顔めがけて滑空する教科書とファイル。一瞬躊躇する三人と、遅れて廊下の端に姿を見せたボスザル。ぼくはもう後ろを見ずに、階段を二つ飛ばしで下りて最後の六段を一気に飛び降りた。尻ポケットのプレイヤーが熱を持っている。廊下に打ちつける自分の靴音がやけに響く。螺旋状に続く、逃げ道という名の滑走路。飛んでしまいそうだ。

GONNA RUN AWAY! GONNA RUN AWAY! GONNA RUN AWAY!

頭がガンガン痛んで、息が苦しくなる。脚がもつれる。膝から力が抜けて、昇降口でつまずいた。膝が割れるように痛み、脚に力が入らない。重く不規則な足音がいくつも耳から身体に伝う。背筋を冷たくて熱い何かが奔りぬける。逃げ切れない。熱の塊が覆い被さってくる感覚。背中に足の裏を叩きつけられて腹が剥き出しのコンクリートに潰される。身体の中身を通りすぎる衝撃。吐き気。

I wanna know the truth instead of wondering why... GONNA RUN AWAY!

『どうしてって思う代わりに、真実を知りたい。逃げろ、逃げるんだ』

むちゃくちゃに振り回した腕がぼくを踏んだやつのすねに当たった。膝の下を狙って拳を叩きつける。骨どうしがガツッとぶつかるいやな手応えと、跳ね上がる脚。横に転がって脚から逃れると、別の誰かの上靴の足がぼくの腹めがけてスローモーションのように迫る。反射的に腹を膝と腕で庇い、丸まって歯を食いしばる。熱く重い衝撃が肘から肩までを強烈に走り、後頭部が下駄箱の鉄板にぶつかって意識がぐらりと傾いた。急激な疲労で腕が動かない。腹も頭も庇えない。やばい。次がきたら、

「 」

名を呼ばれた気がした。

耳障りなかましい金属音とともに、斜めになった視界にねずみ色の塊が尾を引き、ボスの右耳をかすめてぼくの前にいた痩せ型のガキの頭に当たる。へしゃげた鉄のバケツ。疲労に落ちる目蓋の下から見たのは、赤味がかったくしゃくしゃの短髪。その少年は素晴らしいスピードで手前にいたボスに殴りかかる。よけるひまもなかった。腹にぶちこまれる速い拳。そして、体勢をくずした瞬間に鮮やかな回し蹴り。よろけたボスを、彼はもう見もしない。

「きょーいち！」

ヒビのある鐘の音がせつぱつまったふうにぼくを呼ぶ。押さえきれない安堵と悔しさと情けなさの中で、ぼくは意識を手放した。

外からの光を、かげろうの羽みたいな薄緑が透かして弱めている。いつも決して明るくはない、穏やかで乾いた薄暗がり、子供の頃多少の後ろめたさとともに潜り込んだ祖父母の寝室のようだ。生きる気配の希薄な、時間の流れの遅い空間。カーテン一枚へだてただけで、そこは隔絶されたように静かだった。

からから、とレールの上を扉のはしる音がして、人の気配が増える。机に向かっていただけのろう養護教諭が身動きしたのが判った。

「ああ、恵須くん」

鼓動がひとつ飛んだ気がした。気安い声に、彼が何度もここを訪れていたと知る。でもそれよりも、今のぼくには彼と顔を合わせずにすむ方法のほうが大事だった。

いやだ。来てほしくない。

言えるはずのない言葉を喉の奥にためる。ぼくにできたことは、頭からうすっぺらい布団をひっかぶってわざとらしく寝息を立てることだけだった。ちょっと出るからよろしく、と先生の声。はいといらえる英嗣の声。上靴のぺたぺたいう音が胸に一本ずつ針を差し込んでいく。シュ、とカーテンを開け、そして引く音。パイプ脚のスツールに腰を落としたのだろう、わずかな金属のきしみがきこえた。

そして、即席の個室に細く勁い糸が張りめぐらされる。優しくて深い許容の懐が広げられ、そして英嗣の背中にざっくりと刺さる爪。

いやだ。いやだ。おれだけは、おれだけは絶対、だからこんなにも、お前から逃げてたのに。

「きょーいち、なあ、おれ、悔しいよ」

ぽつんと英嗣がそれだけ言って、口をつぐんだ。

責められながら、謝られている。ぼくは息を殺して、奥歯を削れるほどかみ締めていた。

頼むから、謝らないでほしい。悔しがらないでほしい。ぼくは、自分のちっぽけでくだらないプライドの全部をかけて、Sには頼りたくなかったのだから。

「どうして言わなかったんだ。どうしておれから逃げてたんだ。……気づかなくてごめん。助けられなくてごめん。ごめん」

いやだ。もうやめてくれ。そんな声は聞きたくない。そんな謝罪なんて要らない。何で、なんでお前が、

「謝らないで」

ぼくは布団をはねのけていた。目をまん丸に見開く英嗣に上半身だけで詰め寄って、怒鳴りたいのをがまんして低く言った。

「おれにだって、プライドがある」

その場から、いっさいの熱が消えた。

ぼくはその時の英嗣の顔を一生忘れない。今も、カーテンに囲まれた部屋のあのきしんだ空気ごと、生々しく思い出せる。

驚愕は波のように引いて、英嗣は急に生気をなくした。あのいたずらっぽい余裕はすっとどこかへ落ちてしまった。どうしようもなく傷ついて、自責する表情。直視できないくらいに痛い、幼い表情。

彼のすっきりした眉がゆがむ。右手で顔の下半分を覆うようにして、力なく視線を床に落とす。

「……ごめん、」

悲鳴のように引きつった声で言って、英嗣はとうとう背を向けた。カーテンを払いのけ、ぼくの視界からあっという間にいなくなった。

両膝に紫色のあざが広がり、手の小指のがわの側面がキシキシと痛む。ひとを殴ったのははじめてだった。殴る自分もこんなに痛いなら、どうして他人を殴ったりするんだろう。

ぼくはよろよると朝の教室へ踏み込んだ。こっそりといくつもの視線がこちらにむかって投げられる。同情、哀れみ、好奇心、侮蔑、怒り。わりとどうでもいい内容だったので、ぼくはそれらをすべて無視した。足の裏を擦るように自分の席へむかう。机は無事だった。イスを確かめる。特に物は置かれていなかった。ねじが緩んでいる様子もない。ゆっくり腰を下ろす。

結局、その日は何も起こらなかった。厭な緊張感があったけれど、いじめの首謀者も取り巻きもそれまでのことを黙殺しているようだった。日がたつにつれ、その緊張感もどこかへ流されて、嫌がらせは終わった。

そして、またひとつSの伝説が広まった。

ぼくは死にたいくらい、情けなかった。

ともだちということばの意味を、ぼくは未だに説明することができない。お互い助け合う？ 思いやりの精神？ 信じあう？ そんなありきたりのことばですら、実践できたことなんてないから。ぼくは、英嗣のともだちになりたかった。本当の友人に、なりたかった。

それは独占欲だったかもしれない。自分の立つ地面を固めたかっただけなのかもしれない。強い自分という幻想に酔っていたのかもしれない。誰かのともだちになりたいと思うことがエゴじゃないというひとを、ぼくは信じない。けれど、わかっているけれど、それでもぼくは英嗣のともだちになりたかった。だから、助けてほしくなかった。

英嗣とぼくの通学のルートはまったく逆ではなかったから、春から夏にかけてぼくらはおたがい回り道をしながら、担任の手際に文句をいったり、読んだ本の批評をしながら帰った。読む本のジャンルが違ったから、最初は話がかみ合わなかったけれど、貸し借りするうちにそれが重なっていくのが楽しかった。彼が歩きながらヘッセの「車輪の下」を難しい顔をして読んでいる横で、ぼくは「金田一少年の事件簿」を、やっぱり難しい顔をして読む。違和感が無性に笑えた

。けれどあの時もぼくらは、他愛ない、どうだっていいことしかいわなかった。たまに自分の夢や思想を熱っぽく語ることもあったけれど、なんだかお互いに踏み込まない領域ができてしまっていた。そんなつきあいかたはもっと大人になってからすればいいと知ったのは、皮肉なことに、もう後戻りできなくなってからだ。

秋、いじめが始まった時期から、ぼくはその回り道をやめた。それどころか、はっきりと英嗣の帰途を避けて帰った。英嗣がどうしていたかは知らない。あの道を通っていたのかもしれないし、まっすぐ近い方で帰っていたのかもしれない。そして、保健室で一悶着起こしてから、ぼくらは学校の中でもお互いを避けるようになった。それはゆっくりと首を絞めるような苦しさだった。英嗣の目が廊下の端をなめて、ぼくの姿を見つける。極力自然に、お互いが足の向くほうを変える。どうしてもすれ違ってしまう時は、まるで触れると感電してしまうとでもいうように、目をそむけ顔をそむけ身体をそむけて、うつむいて通り過ぎる。そんなときは、汚い学校の天井が、まるで三十センチも下に落ちてくるようだった。上靴を履いた足が鉛になった気がした。でも、声を出す勇気なんてなかった。どちらが悪いとかそんなことは考えたこともない。ただ、気まずくて気まずくて、ぼくは目をそらしつづけた。

毎日、泥の中で息をひそめて暮らすナマズみたいだ。どろりとした汚い灰色の粘膜をまとめて、沼の底を這ってゆく。ぼくはおびえていた。英嗣と目を合わせることに、すれちがうことに、姿を見たり声を聞いたりすることに、ばかみたいにおののいていた。それでも廊下や窓の外を探さずにはいられなかった。みじめでひどくさびしかった。

ふと、回り道をしてみる気になったのは、一日英嗣の姿を見なかった日だった。ぼくはびくびくしながら、夏までは何の感慨もなく歩いていた場所をたどった。竹やぶを囲った鉄条網の破れ目へ、やんちゃな子ども（多分ぼくらも含めて）がつけたケモノ道が続く。ひんやりした風が渡って、まぎれこんだカエデの葉が一枚、ぼくの鞆に乗った。歩きにくい道を踏み分けふみわけ、ゆるやかな坂を登る。足もとに病葉のモザイク。けっこう滑る。

英嗣の声は、遠い竹林から響く葉ずれの音に似ていた。先になり後になり、どうでもいいことを楽しそうに語る英嗣のことばと、竹たちのささやきがするすると重なって、ぼくはてきとうにあいづちを打ちながらその音を、ことばでも声でもなく音を、ぼんやり聞いていた。

ぬるい水って感じ。

ぼくに焦点を絞った英嗣の眼が、ふとゆらいで、ぼくを貫いて遠くを見る。映画のように、思い出すその情景。

お前って、常温で放置した水みたいだよな。混じり気はないけど澄んだ感じはしなくて、冷たくも熱くもない。その眠そうな目とか、やる気のない髪型とか。

そう、かな。

ぼくはいつもと同じようにあいまいに笑い返して、英嗣の口もとを見ていた。音が心地よかったからだったか、それはもう覚えていないけれど。

おれ、そういうの好きだな。うらやましい気がする。

そのことばが、葉ずれのなかを吹き抜けていった。ぼくは何の前触れもなく思い出した。確か

に英嗣は、そう言ったのだ。

脚が動かなかった。根が生えて、自分が竹林の竹になってしまった気がした。ぼくはひとり、その場に立って、前を見ることもできずにうつむいていた。

葉ずれがさわぐ。

英嗣はいない。

そむけた視線、交わらない経路、避けあう日常、誰が悪いとかそんなんじゃない、気まずくて顔をあわせづらくて、

あんなに、近くにいたのに。

喪失が胃の底に沈んで、ぼくはぎゅっと目をとじた。

窓際にすわっていると、ガラスごしに冷気が手をのばしてくる。ぼくはみじろぎして、右のてのひらで左こぶしをつつんだ。数秒したら逆もあたためる。そうしないと、ノートもろくにとれなかった。いつのまにか、熱のかたまりだった太陽は遠く弱く白い光を投げかけてくるだけになって、すきま風に鳥肌がたつ。夏も秋も、もうずいぶん昔のことのようだった。

授業の音が、古いテープを回すように単調に続いている。ぼくは機械的に黒板の文字をノートに丸写ししながら、時おりぼんやりと外をながめていた。

突然、上の音楽教室から教師のがなる声が聞こえ、何人もの声がそれに重なる。不審に思った教室中の目が窓に向く。いきなり小柄な影が、配水管をつたって落ちてきた。窓の外に文字どおり降ってわいた影に、教室中の生徒が眼をむいて声をあげる。授業をしていた教師はあっけにとられて、きれいに着地しすぐに走り去っていく少年を見つめている。ぼくは何もないような顔をして、ノートをにらんでいた。 AC49、元老院令、ルビコン、賽は投げられた(The cast is die.)。何が書いてあるかなんて、さっぱりわからなかった。

驚きのために教室はしばしざわついたが、教師があきらめた顔で黒板のほうを向くと、徐々にそれもおさまっていった。

ユリウス＝カエサル。英名を何という？ 落ち着かない沈黙。

高校入試が目の前に迫っていた。

そして、昇降口にも、教室にも、廊下にも、圧迫感のあるいらいらした空気があふれてばんばんに膨れあがる二月が来た。こぜりあいはいしょっちゅう起こる。だけど、誰も爆発しない。不発のダイナマイトのかたまりが教室にたむろしている。ぼくはそんなに繊細でもなかったけれど、居心地の悪い教室をなるべくさけて、ほとんど図書館にこもっていた。寒いのはわかっているのに窓際に行ってしまうクセも、窓の外をとおる鳥の影にいちいち顔を上げてしまうことも、なにもかもがうんざりだった。ため息をひとつついて、国語のワークを白くてすべすべした机に広げる。「()の祭り」空欄に入る漢字を書き、近いことわざを選べ。ア、ト。「覆水盆に帰らず」。まったく、けんかを売ってるんだらうか。そんなこと、言われなくたってわかってるのに。

早々にやる気をなくしたぼくの右隣で、ひそひそと会話していた女の子たちに図書委員がすうっと近づいてくる。ちょっと、しずかにしてもらえますか。女の子たちはそれぞれ、言うだけ言って去っていく図書委員をにらんだり、きまり悪そうに苦い表情でうつむいたりしている。ぼくはきっかけができたことを幸いに、はじめたばかりのワークを閉じて図書館の出口へ向かった。

空でも見なきゃ、やってられない。

階段の封鎖をベランダからのショートカットでクリアして、屋上へ。とちゅうで鞆を落としそうになってひやりとする。ぼくの父さんは、傘で空を飛べるかためすために、小学校のころ傘にランドセルを引っ掛けて屋上から投下したらしい。結果は、下にいた教頭に直撃してこっぴどくしかられただけ。見つからなければ、ひょっとしたら今ごろ父さんは屋上からダイヴして星の人だったかもしれない。それとも、メリー＝ポピンズ？

ぼくの止まり木には先客がいた。真っ黒な羽の大きなカラス。ぼくが顔を出すと、不満そうに一声鳴いて場所を空けた。飛び去る影を追って、ぼくはくもった重たい空を見上げる。黄土色と紫を混ぜたみたいな、きもちのわるい色をした雲が空を埋めつくして、指先や耳たぶを切る勢いで風が吹き降ろしてくる。長居すると凍死しかねない。ぼくは口もとまでマフラーをぐるぐる巻きにして、吹きまくる風になぶられながらつつ立っていた。色をなくした運動場や近所の庭の木が寒そうだ。この辺には高い建物なんてないから、視界をさえぎるのは雑木林と低い丘。茶色や灰色、くすんだ深緑と、家の屋根と電信柱のごちゃごちゃした色味が、セロファンをかけたみたいに雲の色に染まっている。露光に失敗した写真のようだ。あちらこちらに好き勝手にのびている電線のクモの巣。

ごうごうとうなる零下の風が、パーカーの裾についたジッパーをチリチリと鳴らす。息の湿り気が口もとをいっとき暖めて、すぐに冷たくなる。ぼくは自分の中身がからっぽな空気で満たされていくのをぼんやりと感じていた。

錆びた鉄の階段に、タンと重みのかかった音がした。ぼくが何げなくふりかえると、にぶい青のブルズンを着た少年が上半身を屋上に乗り出したまま硬直していた。目が合ってしまうと、そらすのさえやるせない。英嗣はぼくを見て、さっと表情を変えた。とても複雑な表情だった。

おたがいに無言で、距離を縮めることも去ることもせずに、数十秒がすぎた。たぶん、これから先も、あんな長い数十秒を体験することはないだろう。風と、それに吹き散らされる白い息の動きがなければ、まるで写真のような光景だった。何度も口を開こうとしてやめる英嗣。下唇を噛んだまま、ばかみたいに棒立ちになっているぼく。耳朶が痛いほどの風。

英嗣が、覚悟を決めたように——でなければあきらめたように、手すりに手をかけて身を乗り出した。ぼくの五歩手前まできて（なんと微妙でむなしい距離なんだろう）、彼はぼそりと言った。

「『煙と（ ）は高いところが好き』。空欄に入る言葉を漢字二文字で答えなさい」

「英嗣」

ぼくが呟いたことばに、英嗣は顔をくしゃっとゆがませて笑った。

「ひっでえ、おれって馬鹿の代名詞？」

ぼくはつられて笑った。せつなくて、とてもかなしかった。

英嗣は急に笑うのをやめて、ぼくをまっすぐ見た。

「悪かった」

とうとう来てしまった。恥じるように呟く英嗣に、はじめて見たときの天真爛漫さなどかけらもない。

「誰かが困ってるのを助けられたら、必要としてもらえると思ってた。居なくてもいい人間じゃなくなるって、」

「エイシ」

「それが、プライド傷つけることになるなんて気づいてなかった」

ああ、やっぱりだ。そんなのじゃない。ちがう、ちがうんだ。ぼくは胸の中だけで悲鳴をあげた。けれど、それが音になることはなかった。

「ごめん」

もう、だめだ。

ぼくにその勘違いを訂正する勇気なんてない。それは、せっかく近づくはずの、埋められるはずの距離を引き裂くかもしれなかったから。ぼくは英嗣のことばを待った。予想はついていた。

「おれ、親亡くしてて、親友もいたことないんだ」

Sの伝説は、真実を含んでいた。Sには両親がいない。だからこそ人一倍優しくて、面倒見がいいのだと。英嗣はその美談を否定して、汚す。

「『おれだから』好きになってもらえたことなく、だから、頼られれば、安心だったんだ。自分のためにやってた。……ごめん」

そんなことはいいんだ。ずっと前にわかっていた。それで救われた奴だっているから、懺悔の必要なんてない。誰だって純粋な善意で人を助けてまわるわけがない。そんなことで、おれはお前を避けてたんじゃない。

ぼくは暗い決意をした。そして、なるべく甘い声をつくった。

「いいんだ。もう、怒ってない。助けてもらったのは嬉しかったよ。おれのほうこそ、ごめん」

吹き荒ぶ寒風の中、ぼくらは自然とあゆみよった。ぎこちなく笑いあって、ぼくらはおたがい

を許した。

ひどい嘘だった。

助けてもらったのが嬉しかったって？ 助けてもらうのが、あれほど厭だったのは、生まれてはじめてだ。

イツノーユース、クラインオーバースピルトミルク。

受験がはじまって、職員室が戦場のような雰囲気になっている。飛び交う情報、合格と不合格の連絡と対策。ぼくは受験結果の発表会場からじかに足を運んで、担任の姿をさがした。担任は職員室の正面にある電話の受話器を肩で支えてファイルをめくり、何事かを言って回線を切った。ぼくが呼ぶと、彼があわててかけよってくる。その背中であたまたま呼び出し音が鳴り始めて、別の教師がそれを取りに走る。ぼくは担任が目の前にくるのを待って言った。

「本命私立、合格しました」

担任が詰めていた息を大きく吐きだし、破顔する。

「そうか！ よかったよ、よくがんばったな」

ばしばしと背中をたたかれる。ぼくは苦笑いして、それからお礼を言って職員室を出た。

ぼくが受けたのは、有名な私立の進学校。全寮制で、ここからは新幹線を使わなければいけないような場所。だからもう、しばらくここに戻ってくることはない。

きし、と肋骨の奥がきしんだ気がした。

「おめでと」

相変わらずの窓際の席に戻ると、外から顔をのぞかせた英嗣がにかっと笑って言った。

「もう聞いたの」

耳の早さはそこら辺のオバサンより上だ。英嗣は片眉を下げて、変な顔をした。彼が開け放った窓から、凍える空気が流れ込んでくる。

「さっき、おれも職員室にいたから。気づかなかったろ」

「うん、知らなかった」

「とにかく、決まってよかったじゃん」

がらんとした教室を見渡す。今日は土曜で、ぼくら以外に人の気配はない。見慣れた教室も人がいないと広いものだ。カーテンがはためいて、ぼくと英嗣のあいだを一瞬さえぎった。ぼくは春を思い出して、奇妙な感慨にふけた。そうして、ふと気づく。

「エイシは何で学校きてんの？」

彼は苦笑した。

「おれも合格の報告。本命は公立だから、まだ遊べないんだけどな」

「そっか」

ぼくはいつもどおり、あいまいに笑った。

「でもいちおう、おめでとう」

「おう」

しばらくの沈黙。

ぼくは、裏切りに似た後ろめたさで彼の顔を眺めていた。

ぼくは犯したかった。傷つけたかった。無難な付き合いや庇い合いなんてしたくなかった。奪って踏み込んで、お互い血を流すまで距離を縮めてみたかった。妥協とか、思いやりとか、そんなものは欲しくもなかった。そして、それは「強い」英嗣に懺悔をさせることで、一定満たされていた。ひどく下卑た満足。

今度、踏み込まれなければならないのは、恥をしのばなければならないのは、ぼくだ。けれど、ぼくはそれを避けた。あのときついた嘘を、本心を語って置き換えることなど、出来るはずもない。

それは恋情の狂気にも似た感情だったから。

誰にだって、ひとりやふたりそんな人物がいるのだと、最近思う。理由があって尊敬するのではなく、ただその人の仕草や見た目や考え方や、そういったものが自分を虜にするような。ひょっとしたらそういうのをカリスマだとか魅力というのかもしれないけれど、とにかく、訳もなく惹かれる人物。性別も年齢も関係ない。ぼくにとっての英嗣はまさにそれだった。手が届きそうなのに、なぜかどうしても勝てないと思ってしまう。憧憬の対象になってしまう。不遜で激情型の性格や、赤く透ける髪や、声。ことばの選び方、不安定な精神、その全部がぼくにとっては魅力的だった。

助けられたくない。だってそれは彼にとって、数あるケースのうちの一つ、数え切れないクライアントのひとりになりさがることだから。

ぼくは彼につりあう自分でいたかった。彼に頼るのでなく、対等で、それゆえに特別でいたかった。ぼくのプライドが、意地が、彼に甘えることを許さなかった。ともだちに、なりたかったのだ。対等で、特別な。

けれど、そんなことを正直に言ってしまったら、英嗣は何を思うだろう？ 気持ち悪がりはないか？ 嘘をついた自分を信じなくなってしまうのではないか？ そもそも、言うことに一体何の意味がある？ 英嗣はぼくに近づいたと、そう思っている。それでいいのではないのか？

「ともだちになりたい」。そのことばがこんなにもエゴに満ちた醜いものだと思ったことはなかった。

英嗣は煙草をくわえ、ジーンズの尻ポケットをさぐった。ぼくはそれをにらんで、ハサミを煙草にあてた。

「火つけたら、切るよ」

「ちえ」

英嗣は残念そうに口から煙草を外す。そして水から上がった犬のようにぶるっとおおきく頭をひとつ振って、フードつきのコートの襟をかきあわせた。短く切った襟足がうなじをさらして、寒そうだ。

「帰ろうか」

「おう」

久しくとおらなかつたあの回り道を歩くことになるだろう。
ぼくは屈託なく笑う英嗣を見て、足もとが沈む気分だった。

英嗣はいつもにまして機嫌がよかった。わだかまりがなくなつたからだろうか、よく笑い、くるくると動き回る。今もまた、竹のあいまを器用に抜けていきながら、大声で洋楽を歌っている。

「恥ずかしいなあ、もう」

いやみぶって言うけれど、声がまるくなっているのは否定しない。自分にとって影響力のある相手に気かけられると、誰だって嬉しいものだ。けれど、心の底から素直に喜ぶことはやっぱりできなかった。

英嗣はぼくと仲良くなれたと、思ってくれているだろうか。——思ってしまったのだろうか。それはうれしく、かなしく、安心することだった。

本心なんか知られたくない。

分かれ道が近づいてくる。英嗣はその岐路に立つうちの学校の生徒らしき集団を見て（うちの学校は私服だから断言はできない）、すつと顔をひきしめた。それと同時に彼らもこちらに気づく。

「S！ ……と、誰？」

ぼくらは顔を見合わせる。英嗣は一瞬迷つたようだが、するりと言つた。

「友だち。末沼恭一郎」

「末沼って、学年で一番頭いいとか言われてる？」

それがどちらにむけて言われたものかはわからなかつたけれど、ぼくは一応こたえた。

「おれは、万年二番。一番は三組の、」

「あー、そうなんだ。なんか変なコンビだな」

ぼくの言葉にかぶせて、彼らは言ってけらけら笑う。もっとも、それに関してはぼくも異論がない。英嗣だけはいやそうに首をふつた。

「お前らに関係ないだろ。じゃな、きよーいち」

「うん」

彼と別れて帰路をたどりながら、ぼくは今聞いたことばを反芻していた。

友だち。

それは甘美で、胸をえぐる響きだった。

耐え切れなかつた。信頼されてそう言われているのだとしたら、なおさらだ。嘘をついたらあっさり信じられて、あまつさえ慰められたりほめられたりした経験があるなら、きっとわかるだろう。

うしろめたくて、たまらないんだ。

自業自得だって、痛いくらいわかつていても。

家に帰ると、ぼくは何にも手につかない鬱々とした気分をごまかそうとして荷づくりをはじめた。卒業式が終わったらすぐに家を出て寮に入らなければならない。何せ、あの高校は入学前から自主とふざけた名前のつく学習が始まるのだ。ぼくは山積みになったノートから、要るものだけをより分けて紙袋に放り込んだ。

自慢じゃないが、ぼくのノートの量は尋常じゃない。授業中に使ったり参考書の答を書いたりするノートは、ぼくじゃない誰かの思考の産物で、だから理解が遅くなったりすぐに忘れてりする。ぼくは自分の思考通りにもう一度内容をまとめなおして、それを勉強の材料にするのだ。テスト前の付け焼き刃なんて必要なかった。一度自分の中で噛みくだいたものをすでにまとめてあるのだから。そう言うと、たいていの人には気の毒そうな顔か、こいつ変態かって顔をする。勤勉ってそんなに疲れるものじゃない、とぼくは思うのだけれど。

英嗣はぼくと正反対だ。授業中は全然ちがうことを考えていたり、寝ていたり、それ以前に授業に出ていなかったり。当然テストは一夜漬けの勉強でやり過ごす。しかし、彼の成績は（テストだけでいえば）決して悪くない。彼はのみこみがはやく、勘が鋭く、機転がきく。だから、知識を自分のものにするのが巧い。そして、恐ろしいほどの集中力で、足りない時間をカバーする。

そのかわり、とぼくは思わず苦笑した。

彼のコンセントレーションはそう長くは続かない。というより、集中しているときとしていないときの落差が激しい。それがたぶん、あの緊張と弛緩の差なのだ。どこをみているんだかさっぱりわからない目をして、洋楽を耳から流し込みながら煙草を吸う英嗣は、緊張のはざまでつかの間の休憩を取っていたのだろう。もしそれが、他の誰にも見せない一面だとしたら。ぼくは一瞬、このうえない愉悅にめまいを感じた。

手がとまっている自分に気づき、そして現実逃避めいた回想と妄想も自覚して、ぼくはなんだかむなしくなってしまった。恋に恋する女子だって（偏見かもしれないけれど）、ここまで執着したりしないだろう。たかが、自分にとってちょっとカリスマ性のあるだけの同年代の少年に。

それがわかっているから、余計にややこしいのだ。ぼくは自分が嘘をついていることを、善いことだとは思っていない。裏切りだとすら感じている。けれど、当人に話すことはどうしても矜持が許さなかったし、拒絶も恐ろしかった。

誰が、同い年の同性に「お前にあこがれてる、お前の特別でいたい」なんて言われて鷹揚に受け流したりできる？ 言うこっちだって悶絶しそうだ。

想像して思わず赤面してしまったところに、母親が顔を出した。

「恭一郎、もうかたづけてるの？」

ぼくはちいさく笑って、授業終わったやつだけだよと適当にごまかした。あせったせいで積み上げていた参考書や教科書を裏拳で殴ってしまい、ざらざらと音を立てて壁がくずれてちらばる。そのすきまから、ポストカードの二倍くらいのサイズの写真が、ビニル袋に包まれたままのぞいた。

四月に撮った学年の全体写真。たぶん、卒業アルバムにも転用されるのだろう。ぼくはまぶしそうに目を細めて顔をしかめた自分を見つけて苦く笑った。よく晴れた日で、降りしきる陽光が

記憶にも白く焼きついていた。

ぼくは意識して、情けないくらいわざと、そこに英嗣の姿を探さなかった。

きしり、きしり。

みずたまりに氷の張る音を聞いたことがあるだろうか。素足で霜柱を踏んだのでもいい。そんな、冷え切って鋭くて血管に刺さるような痛みを、ぼくは感じるようになった。

英嗣が昼休みに、外からぼくのいる教室の壁に身をあずけて、一服しているとき。放課後、回り道をする小さな背中。あらっぽいじゃれかたをしてくるとき。鮮やかに笑うとき。

嘘をついている。自分のためにお前とここにいる。

焦がれてやまないのに、隣にいるとつらい。お互い避けていたときは重く鉛を詰め込んでいた空間は、今、まばゆいくらい真っ白なカミソリに埋めつくされている。

授業はすでにずさんで、自習にする教師も多い。ほとんどの生徒は公立受験にむけて、最後のツメに必死だ。ぼくは授業がはしりすぎてわけがわからなかった第二次世界大戦後の政治について、勝手に本を借りて読んでいた。公民で習った内容が頭をよぎる。需要と供給、インフレ、バブルと不景気と輸出入大国の軋轢。そういえば、最近英嗣に借りた小説はマーケットの話だった。株の売買で利益を作るしくみは、ついこの前やった気がするのに、読んでいてもさっぱりだ。

ページをめくっていた手がハードカバーの端を撫でるだけになり、自分が文字を意味として読んでいないことに気づいて、ぼくはあきらめて本を閉じた。机に左ひじをついて、てのひらにあごをのせる。

考えるのをやめるのは、きっと簡単だ。だから、ぼくは考えなきゃいけない。

ぼくは嘘をつく自分を恥じるべきか？

それとも、相手にとっても自分にとっても恥ずかしくてわずらわしいこの感情を、どうにかして消してしまうべきか？

ぼくはどうしたいのだろう。何を望んでいるのだろう。

——彼の特別でいたい。たった一人の誰か、かけがえのない何かでありたい。くるしみを、手渡してほしい。何でも自分のなかで終わらせずに、甘えてほしい。

羞恥に萎えそうになる思考をふるいたたせて、必死でその先を考える。

——でも、英嗣はたぶんそれを望まない。

今までの自分を叩き折られてまで、甘えたいとは思わないだろう。とくに、できかけの自我を護ろうとしているこの時期に。同じような年の、何の魅力もないぼくなんかに。

じゃあ、ぼくはどうしたらいい？

手が、届かない。

『さよならは絶対言わない。逃げたいんだ』

英嗣が、ささやくような声で歌っていた。梅がぼつりと、とがった枝に文字通り花の顔をみせ

ている。たったの一輪。それでも、あの気高い芳香は鼻腔へするりと入り込んで胸を衝く。

千年前の貴族が言っていた。おれがいなくなっても、春をわすれるな。

受験を終えたぼくと違い、英嗣はまだ戦争のまっただなかのはずだ。けれど、彼はぼくと帰る。塾にも、図書館にもいかない。もっとも、彼は時間をかけたから勉強ができるという体質ではなかったけれど。

ぼくはざりざりとヤスリでけずられるような痛みを気管のあたりに感じながら、精一杯おだやかな顔をしていた。

英嗣はまだ歌っている。

『逃げたいんだ』

——逃げたい？

ぼくに残された、それはやさしくて卑怯な回答だった。

逃げてしまえばいい。

嘘をつかずにいられる。真実を言わずにいられる。傍に居られないのは、正直に言えばくやしかったしさびしくもあったけれど、ぼくは数か月それに耐えた。きっと、自分のなかでこの感情が風化する時まで、耐えられる。

英嗣に背を向けてしまおう。この感情を知られるまえに。

まるで、それを読んだかのように振り返って、英嗣はぼくをみつめた。

「なんでそんな、」

彼は真剣に、苦しそうにぼくにきく。

「泣きそうな顔してるんだ」

お前は知らなくて良いことだよ。

おれの嘘もエゴも臆病さも、お前にだけは渡さないから。おれのプライドをかけて。おさなくもろい矜持のすべてをかけて。

「何でもないよ。のどがちょっと痛かったんだ」

逃げつづければよかったのだと。ぼくはひとり、納得して後悔していた。仲直りなどせずに、おたがい逃げつづけたままでいればよかったのだ。そうすれば、ぼくはこのいまわしい、恋に似た憧憬を自覚することもなかった。傍にいるのがつらいなんて、どっかの薄っぺらい曲みみたいなことを経験せずにすんだ。

無様だけれど、こんな感情を知られるのも、嘘をつきつづけて後ろめたさにつぶされるのもまっぴらだから。ぼくは背をむけて、必死で逃げる。英嗣が審判を下すまで。

ひとりの家路を終えると、うちの毛むくじらの家族がぼくを迎えてくれた。リュネ。ゴールデン・レトリバーの長毛種。ぼくをみて、なりふりかまわずしっぽをめちやくちゃに振って、でかい体でとびついてくる。きのうまではあちゃんの家にあずけられていたので、さびしかったのだろう。

ぼくはリュネの前足の硬いつめがベルトにかかるのを、握手をするように外してやって一緒に地面にすわりこんだ。黒い首輪のついた、ふさふさしたイヌ臭い首に抱きついて、軽くたたくように撫でてやる。リュネはばさばさとすだれみたいなしっぽを振って、ぼくの頬と襟もとをなめた。荒い息づかいと心音がぼくの回した腕につたわる。

人間に生まれていなかったら、ぼくだって好意を表すのに何ら躊躇しなかったのにな。

傍に居ること、嘘をついてでもともだちでいること、本当の気持ちを語ってしまうこと。それを投げ出したぼくは、やっぱりずるかったのだろうか。善悪はぼくにはわからない。

英嗣は本命公立に難なく受かった。前日は勉強ほったらかして部屋の片づけしてたよ、何年ぶりにすっげーきれいになったと楽しげに言う英嗣にぼくがどうしようもなく嫉妬して羨んであこがれたのはいうまでもない。

だってぼくは、当日の朝まで過去問を見返しては胃をキリキリ痛めていたんだから。

私服の卒業式はなんだかカラフルでおもしろい。スーツに着られている少年、普段どおりのラフな格好のやつ、袴や明るい色のスーツの女子。華やかをとおりこして水商売みたいにハデなやつもいたりする。ぼくは地味なダークグレーの三つ揃えに、普段はかない革靴をはいたせいでなんとも居心地が悪かった。かかとがすれて痛い。このままだと、帰るころには下ろしたての靴下がひどいことになっていそうだ。ぼくは教室でわたされた花かざりを、ちょっとばかり躊躇してからつけた。まわりのクラスメートたちも、照れた顔で左胸にピンをとおしていた。気恥ずかしさをごまかそうと互いにからかいあう彼らが、ひどく遠く、いとおしく見えた。

あれくらい無邪気でいられたら、きっともっと楽しかったのだろう。

ぼくは自分の席にしずかにすわっていた。十一か月前、ぼくの左隣の汚れたガラス窓のそとに、急にあらわれた影を思い出す。ぼくはごつんとガラスに頭をぶつけて目をとじた。机をぬくめる陽射しだけが、あのときと変わっていなかった。

黒板の横にかかった時計を見あげた担任がそろそろだなと言って、生徒たちはわらわらと席を

立つ。黒板にチョークで書かれた卒業おめでとうございますの文字と、コルクボードにも窓にも貼りつけられたペーパーフラワー。去年はぼくも作った覚えがある。昨日の夜にでも下級生がセッティングしていったのだろう。すこしゆがんだレタリング文字が努力のあとをうかがわせる。

クラスの全員が廊下に、出席番号順に並ばされた。進行役の教師が走ってきて、入場がはじまりますと告げた。

三年という時間が、長いのか短いのかぼくは知らない。けれどぼくにとって、この一年は確実にその前の二年よりも重い。ぼくがもう顔をあわせないと、寮の住所も知らせないと決めたひとりの少年にとっては、その時間の重みはどれくらいなのだろう。ぼくが彼につけた、そしてこれからつけるだろう傷は、どれくらいの深さになるのだろう。それが彼にとってひどい深手になるのなら、ぼくは一生つづく後ろめたさを背負うことになる。けれど、それが浅い擦り傷ですむとしたら、ぼくはどうしてもなく悔しくてむなしくてせつない。

人を小ばかにしたクイズ番組みたいに、最後の答えに念を押されている。本当にいいんですね？ その決断で、後悔しませんね？

後悔は、きつとするだろう。でも、なにをしたってきつと後悔はすることになる。おれにとってお前はいいともだちだよと嘘をつきつづけることも、こんなにも執着して独占してしまいたいと吐きだしてしまうことも、なにも告げずにはなれてしまうことも。

ならば、一番苦しまずにすむのがいい。

おたがいに、忘れてしまえばいい。

退場の曲はウィーアーザワールド。この曲は勝者のおごりだと思っているから好きじゃない。長くて感動も麻痺しそうな式が終わりを告げ、それぞれの担任につれられてクラスごとの列が花道をとおっていく。すすりなく声が重なる。教師の目じりににじむ涙。ハイになってしゃべるガキ。花道をつくる後輩のなかには、ちいさな花束を抱えているひとも多かった。たぶん、部活の先輩にでもわたすのだろう。ペーパーフラワーでできたアーチを支える下級生がひとりひとりに笑いかけ、保護者と教員が拍手をおくる。やっぱり気恥ずかしい空気を漂わせながらも、うれしそうに卒業生が人でできた道をあゆんでいく。

ぼくはうつむいて、前の女子の肩でゆれる髪を見るときもなしに見ながら歩きつづけた。

「あ。」

予想はしていたものの、本当に顔をあわせてしまったぼくらは同時にまぬけな声を発した。

「やっぱきょーいちも来てたかあ」

「まあね」

英嗣は最後の一段を上りきって、狭い屋上の雨ざらしのコンクリートに革靴を乗せた。ざし、と足もとで音がる。彼は紙袋やら花束やらを抱えきれないほど手にして、すこし迷ってからスーツの尻を地面に下ろした。

「もてるね、エイシ」

笑って言ってやると、英嗣は複雑な顔をする。

「もててるわけじゃ、ないと思う」

面倒をみた生徒からもらったのだろう。彼は恋愛にはあまり積極的ではなかった。それでも、その生来の屈託のなさはひとに好かれる。

「しかし、ここに来るのも最後かな。なかなか、青春らしくていいとこだった」

「不法侵入だけどね」

ぼくが言うと、英嗣は気にするなと得意げに笑う。

「お前さえ黙ってれば、誰にもバレない」

彼は言ってからふと考え込んだあと、尻をはたいて立ちあがると屋上から校庭を見おろす柵にむかった。煙草に火をつけて、ぼくに背をむけたままゆっくり煙を吐きだす。紫煙が吹き抜ける風に散らされて消えるのをみおくって、英嗣は柵から上半身を乗りだして下をながめた。見えているのは、彼がよくとおっていた駐車場だろうか。

彼はすっと顔を上げて、完全に表情の見えないまま、ひとりごとのようにつぶやいた。

「結局、友だちだって言えるの、お前だけだったなあ」

「格好つけるのはいいけど、耳まで赤いよ」

「うるせーよ」

指摘に振り返った英嗣のその表情に、ぼくはたまらなくなつてそっぽをむいた。英嗣は頬を紅潮させたままぼくの頭を乱暴にはたく。

せつなくてせつなくて、泣いてしまいそうだった。

それでも、ぼくの決意は変わらなかった。あんなふうに言われたら、本当のことを言ってしまったら受け入れてくれるんじゃないかと、期待をしなかったといえは嘘になる。でも、ぼくは賭け事師になれない性格だ。もしもそれで拒絶されたときのことを考えると、口にするのはどうしてもむりだった。

「ともだちになりたい」。このことばを、なんのてらいもなく、後ろめたさもなく言える日が来るとしたら、それはきっと、ぼくらが大人になってこの若く青苦い感情を忘れさったときだ。だから、ぼくは逃げる。

ぼくの思いを英嗣が知ったなら、それがぼくの審判の日だ。嘘をついていたこと、焦がれていたこと。そのどちらを、あるいはどちらをも、英嗣は拒否するだろうか。受け容れるだろうか。

そしてぼくは、逃げおおせられるだろうか。

帰宅してすぐ、おおかた整理のおわったトランクにのこりの荷物を詰めこむ。必要な家具や日用品は先に現地に送った。この荷物とまだ冷めてはくれない感情をひきずって、ぼくは明日、すべてから逃げだす。

住所は、教えなかった。

羊の群れのようにおとなしい同級生に囲まれて、ぼくは気を使うこともなく六ヶ月をすごした。ひとりで本を読んでいても、からかわれもしないし声をかけられることもない。高校はこんなものなのだろうか、それとも単にこの環境が特殊なだけか。寮に帰ってきたぼくは鞆をベッドに放って、ネクタイをほどいてハンガーにかけた。ブレザーはまだ用がない。なにせ、夏休みがあけて二週間、そとはまだ陽炎がたつくりの暑さで、陽の下にいると狂いそうになるほどだったのだ。

一瞬、教室の壁に反射する蝉とメタセコイアの会話が瞼の裏側をよぎった気がしたが、むりやり思考を切りかえて部屋を見まわした。

寮の部屋はふたりで使うことになっている。ぼくと相部屋になったのは、やわらかそうなくせつ毛とメガネが児童書の魔法使いの少年を思わせる聡明な男子だ。今はでかけているらしい。

半年も部屋を同じくしていると、相手の好みがわかってくる。彼もぼくも本が好きだったので、部屋の一角は共用の本棚になっていた。こげ茶のおおきな本棚は八割がた埋まり、しかし背表紙はみごとに二分されている。彼は海外のミステリーが好きだった。僕の集めた淡い水色や白っぽい背の文庫と、彼のくっきりとした原色の文庫の背中が段をわけて並んでいる。気分を変えたいときは、お互いに貸し借りすることもあった。彼はぼくがすすめた星新一がいたくお気に入りになったらしい。ぼくもなにか借りようかと、青い背表紙をざっと眺めた。「死体農場」「裁判」、なんだか読む気がしない。そのとなりには、トマス・H・クックの「夏草の記憶」。

ふと、誰かと読んだ本の話をしたくなった。目の端にちらとみずみずしい緑が映って、笹の葉がさらさらと流れる音を聞いた気がした。

パトリシア・コーンウェルの「検屍官」を手にとりて悩んでいたところで、ルームメイトが扉を開けて入ってきた。彼はぼくの手もとを見てかすかに笑い、それはシリーズの最初だよと穏やかな声で言う前から、ふと思いだしたように机にむかう。

「これ、末沼くん宛。さっき届けにきてたよ。速達だって」

彼はすたすたと寄ってきてぼくに手紙をさしだした。

「ああ、ありがとう」

その瞬間、ぼくは遠いなつかしさと寂寥をおぼえた。なにか、手の届かないものをみつけてしまったような、地下ふかく埋めていたものをふいに掘りあててしまったような。

受けとってみると、高級そうな和紙に毛筆を模したフォントでぼくの寮の番号と名前が記してある。胃の底がざらついた気がした。ぼくは胸のうちで自分でもわからないなにかに祈りながら、封筒を裏返した。裏には、恵須正治とある。ぼくは視界がぐらつくのを感じた。吐き気がする。

それは、恵須英嗣の訃報だった。

生命の放射を失ってなお、彼の姿はぼくをいやおうなく惹きつけた。静謐な顔にときおりよぎる気がする、苦笑いや悲しみや、そういう繊細な感情。標準の身長も体重もないくせに、のびのびとした筋肉のついた、バネのある身体。それは彼の、生き様を物語るのだと感じた。チープなセンチメンタリズムだけれど、共にすごした一年近く、ぼくはその身体をまとった英嗣を見てきたのだ。愛着も、感傷も、多少はあっていい。

死因は純粋な事故だった。狭い十字路で、スピードを出しすぎた車とバイクで衝突、全身を強打し、病院に運ばれてすぐ息をひきとった。苦しまずに逝ったとはさすがに思えなかったが、今となってはもうどうしようもない。

柩を囲む人々のなかには、ぼくや英嗣と同世代の子がたくさんいる。花にうめつくされた柩のなかの彼に、泣きながらすがっている少女。いつかの、両親の不仲を相談しにきていた子だろうか。その背後には、目を赤く腫らして、顔をそむける中学時代の担任。そして、英嗣と似たおもぎしの、壮年の男性がじっと英嗣の顔を見つめていた。ぼくがその男性をみていると、それに気づいたようにぱっと彼は顔を上げた。

「ひょっとして、末沼恭一郎くんかな」

「ええ。あなたは、喪主の……セイジさん、いや、マサハルさん？」

「マサハルです。いきなり手紙を送ってしまって、失礼したね」

彼は生気の抜けた顔で、しかしおだやかにほほえんだ。ぼくはいいえと首をふって、あわてて頭をさげる。

「知らせていただいて、ありがとうございます。お悔やみをもうしあげます」

「かしこまらなくていいよ。私は英嗣の叔父でね。彼が両親……私の姉と義兄だが、あのふたりを亡くしたあと、面倒をみていた」

さびしそうに、棺に手をかけたままぼつりぼつりと言う。

「やんちゃだったが憎めない子だった」

「わかります」

ぼくはうなずいた。英嗣の顔を見ていたが、どうしても焦点が合わなかった。腹のあたりで組まれた手が細い。死に装束の白さと花の白さのせいで、余計にかぼそくみえたのかもしれない。

「きみには、中学生のころに仲良くしてもらったようだね」

いえ、こちらこそと低く言って、ぼくはうつむいた。あのころのぼくらは仲が良かったのだろうか。英嗣がそう言っていたのだろうか。

ぼくは一呼吸おいて、本題をゆっくりと切りだした。

「彼に、住所を知らせていなかったんです。その、たいした理由じゃないんですけど。今回どうしてぼくの住所を？」

正治さんはかろく目を伏せた。どこかいつくしむような表情だった。

「君のおかあさんにきいたら教えてくれたと言っていたよ。引っ越すことも、住所も英嗣には言わなかったそうだね」

別段責めているふうでもなく、事実だけを告げるように言う彼に、ぼくはそれでも言い訳がましく言った。

「その、ちょっと精神的に参ってたんです。英嗣くんに迷惑はかけられないから」

正治さんはうすく目をひらいた。なにもかも見透かしたように、微笑を含んだ乾いた唇がゆっくりと言った。

「英嗣も、何か理由があるんだろうと言っていたよ。知らせなかったのは君の意思だから、住所を知ったことは黙っておくと。嫌われたかもしれないな、でもおれはそれでも好きだなあと私にのろけてくれてね」

ぼくはそのことばを呆然ときいていた。彼がつづける。

「君の友だちになりたかったと、そんなようなことを言っていた。私が話をきくかぎり、君たちは友だちだったように思うのだが」

ちがったんですと、一瞬本気で言おうと思った。こんなに醜い思いで、傷つけたことも、嘘をついたこともあって、それでもともだちだなんて言えなかったんですと。けれど、ぼくの口をついたのは逆のことばだった。

「ともだちです」

正治さんからすこし目をそらして、英嗣に言うみたいに、ぼくはつぶやいた。

「彼は、一生ものの、ともだちです」

やっと、言うことができる。お前に。

汚くて恥ずかしいこの感情も、犯した過ちも、忘れることはできないしやっぱり哀しくて情けないけれど、それでも。

言わせて欲しい。ともだちであってほしいと。これから先の人生でも忘れられないであろう、特別なひとだと。

「エイシ」

眠るような表情に、声をかける。

「ごめん。ありがとう。……ごめん」

いつか好きだと言った、やる気のない、おさえたような声はまだ変わっていないから。こんな時でさえ、涙もでなくて、叫びもできなくて、ひねくれたおれははまだこどものままで。

しゃべり方が好きだった。その声が。負けたくない、助けられたくない、そう思わせるほど面倒見のいい激情家。対等でありたいと願ったのはそのもろさが怖かったから、強さがうらやましかったから。そのお前がおれに見せる信頼がたまらなくせつなかったこと。

うまくおさえこんだと思っていた感情が鮮やかに胸を満たしていく。

声がききたかったのに。

まだ、あやまることも怒ることも、弱音を吐かせることもしていなかったのに。

寄せてくれた信頼に、友だちだと言ったことばに、応えられてもいないのに。

祈る。願う。呪う。罵る。安らかであれ、楽しかったよ、ばかなやつ、どうして、こんな、そんなのってない。一分でも一秒でもいい、戻ってきてほしい。ともだちだと、それだけ伝える時

間がほしい。

一気にいろんなものがあふれて、のどの奥でせきとめられてふくれあがる。もちろん、英嗣はそんなことは知らないとはかりに目を伏せたままだ。

正治さんは、英嗣とぼくを交互に見つめて、目を細めた。その右目から一筋、涙がゆっくりとすべりおちていった。

もう出棺がはじまる。葬儀屋が最後の花を分けてまわって、しばらくすれば柩は閉められ、車に乗せられる。見送りはたぶん親族だけなのだろうけれど、両親も兄弟もない英嗣の親戚は多くはないようだった。遺影が祭壇からおろされ、正治さんが大事そうにそれを受け取っている。ぼくは柩に視線をもどした。

今やっと、お前のともだちになれる。

遅すぎたと、腹を立ててかまわない。

こぼれてしまったミルクを嘆いてもしょうがない。そんなことは知っている、それでも。

悪かった、ごめん、楽しかった、ありがとう。なくしたくなかった、ともだちでいたかった、二度と会えないなんてかなしすぎる。

さびしい。さびしい。さびしい。

こんなにも、いとしくてつらい。

ひざから力が抜ける。視界が狭く熱くゆがんで、奥歯を噛みしめる。頬に次々流れてあごから手の甲や柩の縁や花に降る涙が、どうやっても止まらずにあふれつづける。のどから締め上げられたような声もれて、ぼくは木の縁に両手の爪をくいこませた。英嗣の顔の輪郭さえわからなかった。熱いしずくが後からあとから目のふちを越え堰を切って、顔中をぬらしていく。

エイシ。英嗣。

名前以外のなにも頭に浮かばなくて、ただそれだけをくりかえす。

ふと気づくと、正治さんが、ぼくの背中をおだやかにさすってくれていた。彼の瞳もまた水の膜を張って、蛍光灯の光にゆらめいている。ぼくは彼の肩口に顔を伏せて、長い間泣きつづけた。

コーヒーの缶を空けて、ぼくはそこに名前も知らない夏の花を三本さして水を入れた。冷水機の水はひやりと冷たく、しなびかけていた花が心なしかしゃんとしたように感じる。

あれから一度も来ていなかったこの中学校の校舎を、なんの躊躇もなくたどっている自分に驚く。足がおぼえている、慣れた道。

突風とすれちがう渡り廊下を、整えた髪を乱しながらとおり、細い抜け道からベランダに出て鉄の階段に飛び移る。缶を落とさないようにと気をつかったせいであやうくおちるところだった。ぼくは喪服の黒いスーツのまま、錆びた鉄板を登る。ガツンガツンと鉄板を叩く革靴の音。飛びたつカラスの影。給水タンク脇の広場の中心に、ひとりで立って虚空を見上げた。暮れかかっ

た九月の空はうすく墨を伸ばしたようにひろがり、雲のない夕焼けは痛いくらい目を射る。ぼくはコンクリートの床にスチール缶をおいて、ポケットを探って、線香のかわりに煙草のケースと灰皿をとなりに添えた。

苦く、せつなく、若い記憶。

美術室でひろった木炭をつかって、ゆっくりと缶の前に書く。彼から借りた小説で、そう書くのだと知ったことば。

09/17/2005 Eishi Esu

Requiescant In Pace

一本ぬいた煙草をくわえ、ライターで火をつけて、すぐに口からはずす。慣れない味にせきこみながら、それをアルミの灰皿にたてかけた。

失ったら哀しい、それだけは嘘じゃない。逃げられもしない。

ぼくがまばたきせず見つめるなか、紫煙が風のない大気の中を、手をのばすように、上へ上へのぼっていった。

了。